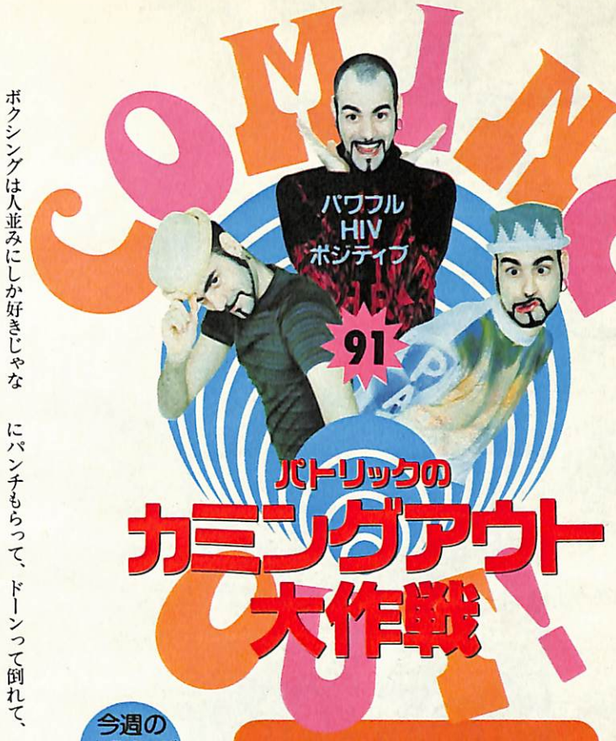


ボクサーとパトが共に闘っている相手とは？

およそスポーツとは縁のないタイプにみえるパトだが、最近あるボクサーを熱心に応援し続けている。パトはボクサーに何をみているのか

今週のカミングアウト

吉野弘幸

1967年東京都葛飾区生まれのウエルター級ボクサー。中学校卒業と同時に現在所属のワタナベボクシングジムに。17歳でプロテスト合格するもデビュー戦と続く2回戦はあえなくKO負け。当時付き合っていた彼女の父親に「世界一になったら交際を認めてやる」と言われ、世界を目指す。が、'93年に世界タイトルに挑戦し、KO負け。のち、1年間のブランクを乗り越え現在36戦29勝（22KO）6敗1分けという成績。パトとは1年前爆風スランプのメンバーに「絶対気が合うから」と紹介されて知り合った。

ボクシングは人並みにしか好きじゃなかったハズのパトリックが最近、釘付けになってるボクサーがいる。

「吉野君っていって、すごくいいコなの。4月23日の東洋太平洋ウエルター級タイトルマッチも観に行っちゃったもんね」

一見、スポーツとは何の縁もなさそうなパトをここまで熱くさせるとは、いったいどんな男なのか。そこで、その吉野氏を訪ねて、彼が所属する五反田にあるワタナベボクシングジムに向かった。

パトリック「もおー、この前の試合は1ラウンドKO勝ちします、とか言って逆にパンチもらって、ドーンって倒れて、キャーッ、どうしようって**泣いちゃったんだから！**」

吉野「ごめんねぇ～」

パ「最終的には、KO勝ちだったから許すけどさ。ほら試合前に楽屋に行ったじゃない。それがまずかったのかなって。しかも、『パトちゃんのために勝ってね』とか変なこと言っちゃったし……」

吉「大丈夫。俺ね、試合前っていつもみんなで騒いでリラックスしてるの」

パ「でも、よく試合前のボクサーってナーバスでずっとコンセントレーションしてるじゃない？」

吉「俺はね、**5分で十分**。長いことやっても本番の試合で疲れちゃうから」

パ「へぇ～。なんかカッコイイ」

吉「カッコイイことないよ。10年以上やってるんだよ。大抵は20戦前後で26～27歳で引退するのに、俺なんか36戦！」

パ「大きな怪我とかしてない？」

吉「左のこぶしくらい。2回手術してチタン合金を入れてる程度で済んでる」

パ「神経系とかには影響出ないの？」

吉「多少、呂律が回らなくなったっていうのはあるね。でも、これはボクサーやめると直るんだって」

パ「ボクシングをやめてもそのノーテンキなところは直らないんだろうね。吉野君は頭をいい具合に殴られてきたって感じだもん（笑い）」

いつもは冗談ばっかりなんだろうけど、実際、パトはリング上の吉野氏にHIVと闘う自分を見ているのだという。

パ「もし、吉野君がフツーのボクサーだったら、こんなにボクシングを好きにならなかったかもね。だって、ボクサーとしては寿命がきてるのに、それでも勝ち続けようとする。きっと知らず知らずのうちに勇気づけられてるのかもしれない」

HIVに負けちゃったら敗者復活戦はないからね

吉「正直なところ、あと1年くらいだろうなって。世界チャンピオンにもう一度挑戦して、それで勝って引退かなぁ」

パ「フフッ、そこで〝勝って〟って言い切るのがいいよね。絶対に負けることをイメージしないところは真面目に尊敬できるもん。勝ち体質っていうか、そこまで思い込めるのって何なの？」

撮影／高橋清人

次の試合の予定は9月末。試合前の2週間は〝ひざにくるから〟禁欲生活に入る、と聞いたパトは「ワァオ～！ 試合後のボクサーを捕まえて、やりまくりたいわ」と……

「大切なのは闘争心だけ。長いことやってるとそれが萎える」

吉「うーん、精神的にタフってことかな。もともと貧乏な家庭に育ったから、ハングリー精神っていうのは人一倍だけど、そうじゃなくて何がどうなっても冷静っていうか、平常心を保っていられる」

パ「それってわかる気がする。どうでもいいことには動揺したりするんだけど、僕の場合はHIVのことに関してはタフだと思うもん」

吉「それと、一度世界戦に失敗しているから、**このままだと負け犬で終わる**ことになる。今の自分にとって世界チャンピオンっていうのは頂上だし、そこで自分自身が燃え尽きないと、納得いかない」

パ「**僕の場合はね、HIVに負けたら敗者復活戦ってないし、そこで人生が終わりになる**。いつも思うんだけどね、仕事も恋愛も何もかもいい状態の時にイケたら、いいなって。でも、そういう気持ちになる時って必ずいいテンションの時なの。例えば、免疫力が77の過去最低まで下がった時とか、そんな余裕はどこにもないからね」

吉「ボクシングの場合、大切なのは闘争心だけなんだよね。**長いことやってるとそれが萎えちゃう**。いかに闘争心を保つかっていう意味では、俺とパトちゃんって同じものと闘ってるのかもしれないね」

パ「そうだね。でも、また最近ちょっと考え方が変わってきてて、いい状態であればあるほど『今はまだイケない』って思うようになったの。今イッても意味がないなって……」

吉「もし俺の体にHIVが入ったらどうするんだろう。パトちゃんみたいに闘えたらいいけどね」

パ「問題ないでしょ、だって気が強いところとバカさ加減が一緒なんだから」

闘争心の維持と勝ち続けなくちゃならないプレッシャー。意外にもパトとボクサーにはこんなに共通点があったのだ。

パトちゃん日記

5月25日

今日の仕事は僕がファッションショーの音楽をステージ上で生で選曲するものだった。窓付きDJブースがステージに設置されててその中で、DJをしたのだ。楽しい仕事だったけど、冬物のショーだから、TシャツでOKのこんなに暑い日でも、冬物のセーターを着用。しかもステージ上の小部屋は風通しがない。さらに照明が僕を照らしてる。ううっ、暑くてたえられなーい。だけどスポットライトを浴びると笑顔を振り撒いてしまう単純な僕でした。

このDJブースは爆時計の爆になった気分になる。クックーッ

パトリックDJ情報●毎週月曜 LOOP on 246

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70 （株）扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

今週のカミングアウト

過激愛国主義マンガ家が、毛唐パトを切り捨てる!?

誰とでもすぐに仲良くなってしまうパト。この連載も取材先と大団円で終わるパターンが続き、ちょっと飽きたので意地悪な企画を試みた

陸月影郎（むつきかげろう）

昭和31年、横須賀市生まれ。ポルノ作家。24歳でSM雑誌にてデビューを飾り、以来、陸月影郎、黒崎竜など複数のペンネームを使い分け、100冊近いポルノ小説を発表。ロリコンから近親相姦、果てはスカトロや屍姦にいたるまでのフェチ色の強い作風で、熱狂的な支持を受けている。一方、ならやたかしの筆名で昭和63年から描きはじめた過激愛国マンガ『ケンペーくん』が一部で話題となり、今年5月に再編集の単行本が発売された。また軍服着用で軍歌を唄う「雄叫会」としての活動も注目されている。特技は剣道、居合道。

軟弱な若者や快楽にうつつを抜かす非国民たちをバッサバッサと斬り捨てる超過激愛国マンガ『ケンペーくん』の作者と、ガイジンでゲイで派手なファッションのパトリックを会わせたらどうなるだろう。きっと大喧嘩になるだろう、とSPA!は少々イジワルな目論見のもと、2人の対談をセッティングしてみた。

SPA!「睦月先生！ こんなチャラチャラした格好のガイジンをどう思いますか？ ひとつ叱ってやってくださいよ」

睦月「いや、彼はガイジンだから、別にどんな格好をしてようがかまわないよ。それをマネする日本人がいたら叩っ斬りたいけど。ケンペーくんのキメ台詞は『**貴様らそれでも日本人か！**』だからね」

パトリック「日本人のくせにガイジンのマネする人ってキモチ悪いよね。最近は黒人のマネするコが増えてるけど、いくら日焼けサロンで肌を黒くしても黒人にはなれないのに」

睦月「うん、実に嘆かわしいよ」

パト「**ゴギャルなんて僕よりひどい日本語使ってるじゃない？** 日本人ならちゃんとした日本語しゃべってほしいよね」

睦月「まったくだ。ああいうバカが大きな顔してうろついているのは許せないね」

……予想を覆すかのように、いきなり意見が合ってしまった。

睦月「愛国心というものはね、日本以外のすべての国の若者が持っていると思うんだ。みんな自分の国と民族に誇りを持っている。それが日本ではこの50年ですっかりなくなってしまった」

パト「でも、日本だって大昔は国に対する誇りなんて、将軍とか武士とかそういう一部の人しか持っていなかったんじゃないの？ それ以外の人はそんなこと考えてなかったと思うよ。今、またそういう人が増えているってことでしょ」

睦月「よく勉強しているね(笑い)。今の人は忙しすぎて他のことまで考えられないんだろうね。でもそれでいいということはないだろう？ まぁ、バカなガキが多いのは、親がバカだからだ。バカは結婚しちゃいかん！」

パト「そうだそうだ！」

愛と欲望は切り離して、性欲はカネで解消しろ!?

SPA!「……それじゃガイジンが日本へどんどん入ってくることについてはどう考えていますか？」

睦月「**あまり俠くは思っていないね。** ガイジンが日本の女のコに声をかけているのを見るとブチ殺したくなるね。ところが女のほうも喜んでいるんだからたまらん。**両方ブチ殺したくなるよ**」

『ケンペーくん』(ジャパン・ミックス) より

パト「それは彼らは日本が好きなんじゃなくて、ただお金を稼げて、女のコ引っかけ放題だから来てるだけなんだよ。そんなヤツらは僕も許せない。女のコのほうもただオチンチンが大きいからついていってるだけだし」

睦月「ただね、この前、居合の試合に行ったときのことだけど、とても素敵な女性が刀をふるっていた。ところがその人はガイジンと結婚しているというんだ。それでオレが『**なんであんな大和撫子が毛唐といっしょになるんだ**』と怒っていたら、剣道の先生に『それはお前ら日本男児がだらしがないからだ』とたしなめられたよ。その通りだと思ったね」

なんだか衝突は起きそうにない。そこでSPA!は少し話題を変えてみた。

SPA!「ところで睦月さんはゲイをどう思いますか？」

睦月「いやぁ、オレもおじさんになったのか**美少年がよくなってきちゃってね**」

パト「それはカミングアウトですか？」

睦月「というか、美しいものは男でも女でもいいだろう。それほど変なことじゃない。**オレは純粋なものを求めているんだね。** だから女性に純粋なものを求めてロリコンに走ったけど、今は少女もダメだから少年に走ったんだ。次はきっと動物にいくだろうね(笑い)」

パト「今のコはヤリまくりだもんね」

睦月「あれは欲望をぶつけているだけで愛じゃない。**愛と欲望は切り離すべきだ**」

パト「睦月さんはセックスはしないの？」

睦月「しますよ。愛の代わりにお金を払ってね。**戦時中の兵隊さんはそうでしたね。** 性欲はお金で買って解消して、自分の本当に好きな人は大事にした。精神と肉体の欲望を切り離すことによって思いをピュアにできる」

パト「僕はやっぱり好きな人とエッチしたいけどなぁ」

睦月「ところでパトリックは**フェティシズム**は理解できるのかな？ 好きな人とセックスしたくはないけど、その人の物は欲しいという。日本の精神性はフェチ文化だと思うんだけど」

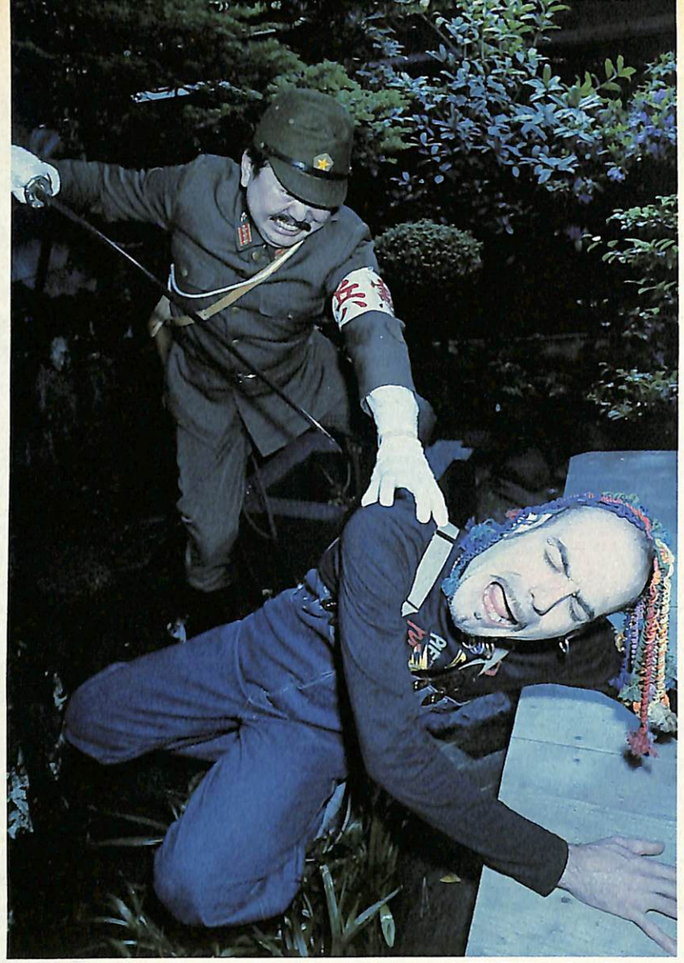
パト「僕は**匂いフェチ**なの。好きな人の匂いを嗅ぐと興奮しちゃう。匂いを消しちゃうなんて人形みたいだよ」

睦月「うん、若いヤツらがセックスの前にシャワー浴びなきゃヤダなんていってるのは腹が立つね。せっかくの匂いを消すなんてバカじゃないか。**ナマの匂いがダメなヤツはセックスをする資格なし！** 昔はシャワーなんてなかったんだから、そのままでやるのが正しいんだ」

SPA!「ああ、フェチの部分まで意見が合ってしまいましたか……。それでは睦月さん、最後に日本の若者にひとことメッセージを」

睦月「少しはパトリックを見習って、日本のことを勉強しろ！」

ち、ちょっと待った！ 日本の若者がみんなパトを見習ったら、それはそれで問題ですよ、睦月さん！



「このオカマのくされ外人が！ 日本から出ていけ」「ひぃー許してぇ」。こんな場面を予想していたのだが……

「大和撫子が毛唐と付き合うのは日本男児がダメだからだ！」

パトちゃん日記

6月1日

薬屋さんにはどうしてアニメになった動物が設置されてるのか？ 気になってた僕。ゲロちゃんとかうさぎとかどこでもある。アメリカにはこんなものないよ。ずーっと何か商品のキャラクターだと思ってたんだけど、あれって製薬会社のキャラクターなんだってね。ゲー！ やりすぎー！ これって必要な物なの？ 更に最近これらを盗む人がいて、10万くらいで売買されてるらしい。薬屋さんのおじさんも先週サトちゃんを1人盗まれてビックリしたんだって。

カワイイとは思うけど……それだけじゃん

パトリックDJ情報●6／29(土)WORLD CONNECTION(DISCO BABY)at YELLOW●毎週月曜 LOOP on 246

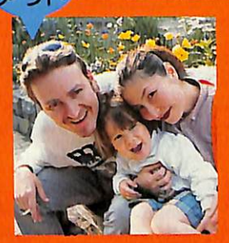
パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70 ㈱扶桑社 週刊SPA！編集部 「パトリック係」まで

撮影／高橋清人

フランスに嫁いだ日本人女性の育児の悩みを聞く

ゲイという特性ゆえ結婚もままならないのに、やたらと子どもを欲しがるパト。今回はみのもんたに成り代わり、育児相談に応じてみた

今週のカミングアウト



パロウー家

パトリックとパロウー家は1年ほど前に知り合った。パロウー家に嫁いだ由美子さんと、パトのマネジャーが親友だったためだ。由美子さんが夫のエマニュエル氏と出会ったのは7年前。彼が仕事で来日した際に知り合い、帰国した彼を追って由美子さんが渡仏、結婚に至る。現在はパリ郊外で暮らし、週に3日働きに出るときは、近所に住む姑（当然フランス人！）に子どもを預けているという。今回はバカンスで日本に帰国。パトの家で帰国前の10日間を過ごした。写真左から、エマニュエル氏（34歳）、由美子さん（30歳）、オデ君（2歳半）。

パトの友人で、フランス在住の日本人女性が一時帰国した。風の噂では彼女は育児方法をめぐる日仏のギャップで悩んでいるらしい。

「アメリカ人という中立の立場の僕が、良き相談相手になってあげようと思って！」

なぜか〝みのもんた気分〟で、鼻息の荒いパトだった。

パトリック「聞いたところによると、息子のオデちゃんが1歳の時、**夜泣き**をめぐって悩んでたらしいじゃない？」

由美子「別に悩んじゃないけど、私はこの子が夜泣くとあやしに行きたかったんだけど、フランス人の考え方は**泣かせとけばいい**って言うの」

パ「なに、それはもしかして、フランスの**お姑さんの入れ知恵**？」

由「違う違う、お姑さんじゃなくて**旦那**のほうがうるさかった。うちのお姑さんは私が日本人であることをきちんと認めてくれてて、もちろんフランスのやり方は教えてくれるけど、それは意見にすぎないの。決めるのはあなたよって感じ」

パ「へぇ～、でも子どもって説明書が付いてないし、いろんな方法あるし、自分のやり方を見つけるまで大変でしょ？」

由「確かにね。最初は育児書とか必死に読んだりしたけど、今は子どもを愛してるっていう気持ちがあればいいやって」

パ「**アメリカだと、生まれてから半年ぐらいの間に子ども部屋を与えて独立させる**んだけど、フランスはどう？」

由「フランスも同じ。習慣として、**親と子どもが一緒の部屋で寝るっていうのは100%考えられないこと**みたい」

パ「日本との大きな違いだよね」

由「ある時ね、うちの子があまりに寝ない子だったから、お医者さんに相談したことがあったの。そしたら子ども部屋がないせいだって言われたの。でも、その時うちはワンルームだったから状況的に無理ですって反発したら、子ども用のテントを作りなさいって」

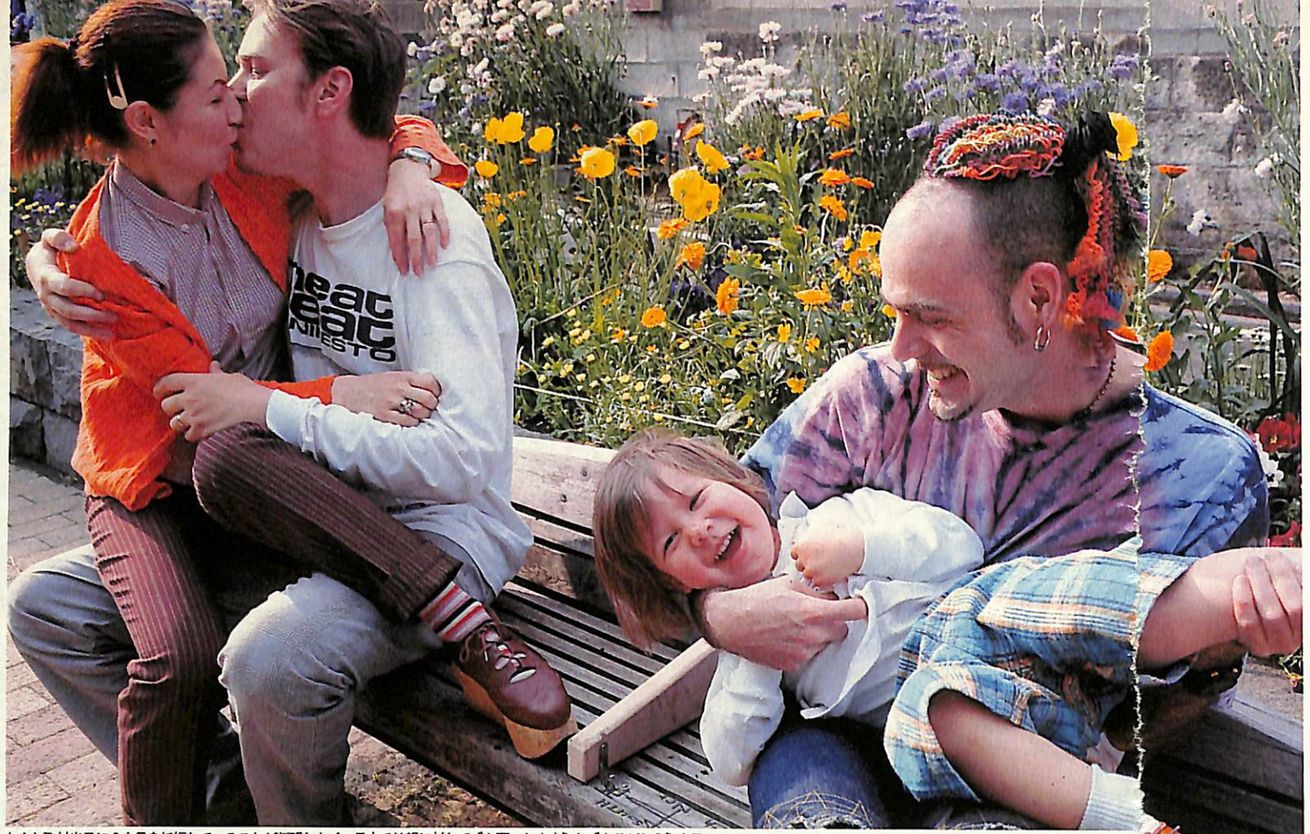
パ「ははぁ～ん、なるほどね。子ども部屋もどきの空間を作るのね」

由「精神科の先生にも、日本にある**〝親子で仲良く川の字に寝る文化〟**は、よくないって叱られたの。子どもは親がどれだけしてくれるかをわかっているから、大人になってもそれが当然だと思う子になる。だからあまり手を出し過ぎるなって。それがフランスでは第一の教育で、それを聞いた時は、素直に納得できた」

パ「アメリカもフランスと同じ。べったり構い過ぎなのは、日本。あれじゃ子どもの意志を無視してるのと一緒だよ！」

由「う～ん、でもお国柄じゃなくて、結局はお母さんの人柄の問題なんだと思う。私が気をつけてることでね、向こうの幼稚園の先生に言われたことなんだけど、**叱る**と〝**怒る**〟は違うってこと。叱るのは躾をすることで、怒るのは単に感情的になってがなることだって」

パ「それは大切なことだと思うよ。だって、**僕のお母さんは叱ることがなくて、怒るばっかり**だったから。それも、ハンパじゃないの。ベルトで思いっきりお尻を殴るか、髪の毛を引っ張って、平手打ちのどちらか。そのせいで、いまだに髪の毛を人に触られるのは大嫌いだもん」



なんと取材当日に2人目を妊娠していることが判明した！　日本では親に対して〝お願いします〟と〝ありがとう〟を言ってない子が多いし、それを叱らない親にびっくり、とのこと

「フランスでは子どもができても〝男と女〟の関係が続くの」

「今のこの子には興味がない」と旦那に言われた！

実際、久しぶりに日本に帰ってきてフランスとの違いを目の当たりにします？

由「日本人って子どもが生まれると、何もかも子ども中心になって、夫と妻の関係が完璧に〝お父さんとお母さん〟になるんだなって。フランスだと、子どもができても男と女の関係が続くのよ。**お姑さんに子ども預けて、旦那と二人でコンサートや食事に行ったり、デートするものなの**」

パ「なにそれ、ノロケ？」

由「違うってば、聞いてよ！　だってひどいのよ、うちの人。この子が生まれて半年間くらい、だっこもしなかったの。なんでって聞いたら、**今のこの子は僕には興味が湧かない**って言われたの～！」

パ「言われたの～！　って言われても、ずいぶんと前のことね」

由「こっちが必死になってるっていうのに、普通そういうこと言う？」

パ「男親ってはそんなもんじゃない。だって、小さすぎて一緒に遊んだりできないし、第一しゃべれないじゃん。それをはっきり言うのは、彼がフランス人だからだよ。僕もそうだけど、フランス人も口に出して言うことが全てだもん。日本人みたく、心で何を思っているかとか考えたりしない。でもまさか、そのことを根に持ってたりしないでしょうね？」

由「**持ってる、持ってる**。女は何年も前のことをネタにケンカできるんだから」

パ「ヤダ、ヤダッ。どの国の女もみ～んな、そうなんだからっ！」

最初はみのもんたのように相談に応じるつもりだったのに、子どももいないくせに、なぜか主婦の井戸端会議にハマっているパトだった。

パトちゃん日記

6月7日

このフライヤーのハーフの男の子を見て「えっパトの隠し子！」って噂流してるそこのアンタ！　残念でした。答えは、今回本文に登場したパロウ家の長男のオデ君でしたー。この家族は滞在中、日本はなぜ銀行のカードが24時間使えないの？とか、なぜテレビでMTVやってないの？とか、僕がすっかり忘れてる不都合さを思い出させる発言を連発。もう郷に従いなさいよー。その代わりフランスにはコンビニもファミレスもないじゃんかよー。

DISCO BABYになってもらったODE君

パトリックDJ情報●6／29（土）WORLD CONNECTION（DISCO BABY）at YELLOW

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70（株）扶桑社　週刊SPA！編集部「パトリック係」まで

今週のカミング アウト

ゲイたちは老後についてどう考えているのか？

"ゲイの聖地"新宿二丁目で10年以上やっているバーでは、年末とり始めた常連客と若い世代との間で老後のことがよく話題になるという

大塚隆史

48歳。バー「タックスノット」のマスターの傍ら、造形作家として活動。近年はゲイ関係のエッセイや翻訳も手がける。昨年、新宿二丁目のゲイライフを描いた『二丁目からウロコ 新宿ゲイストリート雑記帳』(翔泳社)を発表した。かつてラジオ版「スネークマン・ショー」で日本初のゲイ・パーソナリティ、タックとしての活躍を記憶している人も多いだろう。バーの共同経営者だった"パートナー"を'89年にエイズで失うという悲しい出来事もあったが、残された大塚さんを支えてくれたのは、やはり二丁目の仲間だったそうだ。

200軒以上のゲイバーがひしめく世界一のゲイタウン、新宿二丁目。大塚隆史さんは、'68年に初めてこの街を訪れ、そして'82年からはバー「タックスノット」のマスターとして、ずっと二丁目と共に生きてきた人だ。

パトリック「僕、二丁目にはあんまりいい印象がないんだ。オネエ言葉を使う人がいっぱいいて気持ち悪いなぁって思ってたの。僕がヘンな外人だからかもしれないけど、**二丁目じゃモテないし**(笑い)。かえって西麻布や六本木の普通のクラブのほうが可愛い男のコをナンパできるよ」

大塚「二丁目は最初の印象で決まっちゃうところがあるかもね。ちょっととっつきにくく感じる人もいるかもしれない。ここは社会に対するある種のシェルターだから、どんな人でもウェルカム！ウェルカム！って受け入れちゃうわけにはいかないんだ。一度仲間になれれば、しっかり守ってもらえるけどね。**オネエ言葉ってのも仲間になるためのチェック審査なのかもしれない**」

パ「ああ、そういうのはどこの街にもあるよね。ニューヨークでも仲間内でしか通用しない流行り言葉とかあるもん」

大「それからやっぱり外で抑圧されている分、二丁目に来るとオネエ言葉が爆発しちゃうんだろうね」

パ「でもオネエ言葉が似合わない人もいるじゃない。男の言葉でしゃべってたほうがカッコいい人とかさぁ」

大「でも、それはその人がオネエ言葉がしゃべりたいんだから、いいんじゃないの？ 二丁目で学べる一番大事なことは、ゲイにもいろいろな人がいるってことなんだ。オネエ言葉でキャーキャー騒いでいる人もいれば、大人しい人もいる。**マジメに愛を求めている人もいれば、性欲を解消するためだけに来ている人もいる。**ゲイも人それぞれなんだって気持ちがないと二丁目は楽しめないよ」

パ「昔は二丁目でだけカミングアウトしていて、他ではストレートのふりをしている人が多かったけど、最近は社会に対してもカミングアウトする人が増えてきたよね。少しずつだけど」

大「今はどうしてもストレートの人に自分がゲイであることを告白することばかりがカミングアウトだって思われてるけど、本当は**自分がゲイなんだという自覚を受け入れた時から、社会に宣言するまでのプロセス全体が大事**なんだ。まず自分を受け入れる時点において二丁目の存在って大きいと思う。ゲイは自分だけじゃないんだ、悪いコトじゃないんだって教えてくれる場所だからね」

老後で一番大切なのは仲間、これはストレートも同じ！

SPA！「ところで、パトも30歳になったということで(笑い)、ゲイの老後についてお聞きしたいんですけど」

大「ゲイの老後についてよく聞かれるんだけど、それってストレートの人は結婚して、子どもができて、老後は安心だっていう**勝手な思いこみが前提にある**でしょ。ストレートの人は老後は安心だけど、ゲイの人は？って。でも今では定年になったら奥さんに離婚されて、子どもも面倒見てくれないっていう人がいっぱいいるわけじゃない？」

パ「そういう人って、仕事以外の友達もいないんだよねー」

大「僕は今のパートナーと、できれば一生つきあっていきたいんだけど、先のことはわからないでしょ。僕は前にパートナーをエイズで失った経験があるから、なおさら考えちゃう。もし彼がいなくなったら何が残るだろう。そうすると**一番大事なものは仲間、信頼できる友達**なんだよね。経済的なことも含めて、何かあったら助け合う。でも、**これはゲイだけの問題じゃないはず**。結婚して子どもがいるから安心、なんて考えているストレートの男の人のほうが心配なんじゃない？」

パ「僕の知っている人で、ひとりで生きていこうとしているゲイのための老人ホームを計画している人もいるよ」

大「ゲイとしての生き方を選択したのは、日本では僕たちが最初の世代になるんだ。だから、**僕らが先輩として豊かな老後を若いゲイたちに見せてあげなくちゃね。**僕らは大きな実験をやっている気分なんだよ」

パ「でも大塚さんは子どもを残したいって気持ちはないの？ 僕はやっぱり自分のDNAを残したいって欲望がある。HIVを持ってからは、あきらめたんだけど」

大「僕はずっと、**子どもが欲しいと思ったら負けだって自分に言い聞かせてきたからなぁ**。でも、自分の考え方やライフスタイルを伝えたいって気持ちはある。だから、若いコたちに話をするってことで、それを伝えていこうと思うんだ」

「タックスノット」には、二丁目ビギナーの若いゲイがたくさん訪れ、大塚さんは、そのよき相談相手になっている。こうして大塚さんの〝子ども〟は、確実に増えているのだ。

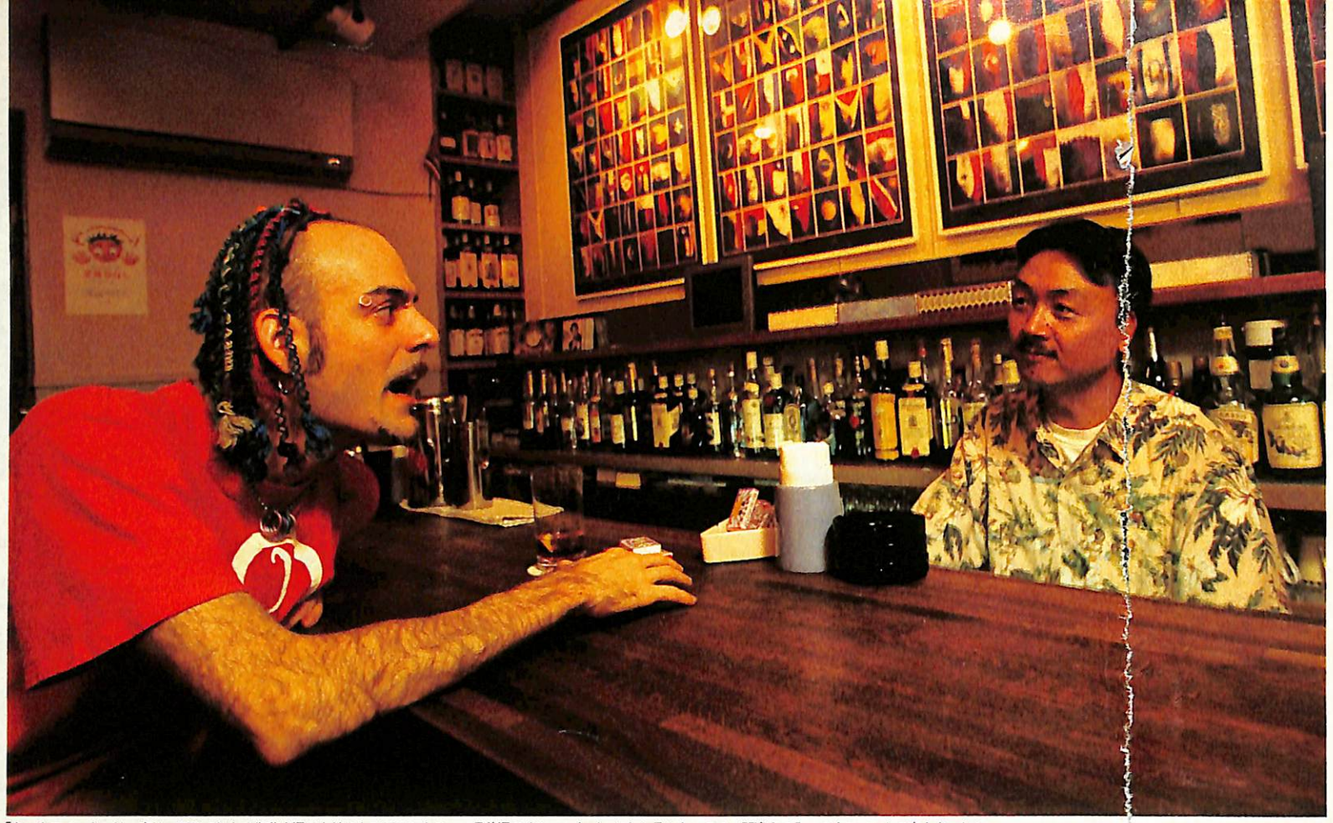
パトちゃん日記

6月14日

子どもの時、アメリカでおばあちゃんがなぜだか「盆栽キット」をプレゼントしてくれた時から、僕は盆栽が好きなのだ。近所で庭いっぱい盆栽がある家があって、訪れてみた。かなり頑固そうなおじいさんが出てきて「盆栽の写真撮ってもいいけど、触らんようにな」って無表情。遠慮ぎみにパチパチ撮ってたら「ほれ、そこの黒松持っていきなさい」って。まるで絵にかいたようなおじいさんの対応にパトちゃん感激！

ちゃんと毎日霧吹きでお水あげてまーす

「僕らが先輩として"豊かな老後"を見せてあげなきゃね」



「タックスノット」は、実は二丁目ではなく御苑大通りを越えた三丁目にある。一見普通のオシャレなバーにしか見えないので、間違えて入ってくるノンケの客も多いとか

パトリックDJ情報●6/29(土)WORLD CONNECTION(DISCO BABY) at YELLOW

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

撮影／高橋清人

今週のカミングアウト

自分自身が作品!? 生きることが芸術!?

過激なコンセプトで表現活動を続ける自称"変態芸術家"に、同じ"マイナー・メジャー"というポジションにいるパトが鋭く突っ込んでみた

イハラヒデカズマルヤッコスーパー
井原秀和円奴S

'68年静岡県生まれ。'88年桑沢デザイン研究所に入学し、在学中に「自分自身が作品、生きることが芸術」というコンセプトのもと、パフォーマンス・ユニット〈ハイド・アンド・スキン〉を設立。自称、変態芸術家。クラブイベントの企画のほか、DDジャケットからコスチューム、キャラクター・グッズのデザインと幅広い活躍。4月には、彼が主宰したキャラクター・パフォーマンス・ミュージカル『幸せの形』で、メディアに数多く取り上げられた。見逃した人のために、8/1(木)にYELLOWで『幸せの形上映会&PARTY』が催される。

井原秀和円奴(まるやっこ)S(エス)……最近クラブで彼をよく見かけるパトリックは、そのビジュアル的なインパクトから興味をそそられていた。

「なんか、キャラクター・デザインの世界では結構有名で、かなりブッ飛んだことを言う人らしいよ」

知人からそう聞いたパトは、自分と同じ"マイナー・メジャー"のにおいを感じたのか、もしかしたら"ボク"的な人かもしれない! と、騒ぐ血をおさえつつ彼の自宅兼アトリエを訪ねることにした。

パトリック「自分自身が作品で生きることが芸術っていう秀和のコンセプトは、**どっからきてる**ことなの?」

秀「"がんばれロボコン"。あれがすごくショックで、現実にあんなロボットがいたら怖いことなのに、あのマンガの世界では普通のこと。それはおかしいんじゃないかって感じたのと同時に、カワイイって。僕にとって、実際あってはいけないものとか、社会的にいけないものがグーで、そういうものを表現したい。それで、**自ら社会的にいちゃいけない人間になって、実在することをみんなに認識してもらえたらいいな**って」

パ「ふ〜ん、じゃあ僕みたいなもんじゃん。日本の社会にこ〜んなイッチャッてる派手な外人はいちゃいけないハズでしょ、本当は。でも、実際僕はいて、努力すれば一般に受け入れられるって思ってるんだけど、秀和はどんな目標があるの?」

秀「最終的には、**スーパースター**かな」

パ「……ってことは、今はマイナーの中のメジャーな人って感じだけど、よりメジャーな世界を目指してるんだ」

秀「いや、単に僕を知ってる人が増えるだけじゃなくて、きちんと認めてくれてないと意味はないなぁ」

パ「でも、**それを求めるのは甘くない?**」

秀「う〜ん、でも、**そうじゃないと幸せじゃない**から」

パトもホンキで驚いた円奴スーパーな感覚

パ「なんか聞いたところによると、サンリオから秀和のキャラクターグッズを出そうと考えていた人がいたらしいじゃないですか?」

秀「あ〜うん、昔ね。でも、やめました」

パ「なんでぇー! **おいしい話**じゃないですか! なぜ、断るの?」

秀「**サンリオになりたいの、自分が**」

パ「そっ、それはどういう意味ですか!?」

秀「僕が作るキャラクターはサンリオのキャラクターではなく……なんて言うかサンリオ自体ではないっていうか……」

パ「**ん〜〜〜あぁ???**」

秀「つまり、サンリオのキャラクターはサンリオ・ワールドで、**僕のキャラクターは僕のワールドに生きるもんだから**」

パ「で、で、でも、それを実現するために、ナニ、デッカイ企業でも作ろうっていうの? できるか?」

秀「うん、**できる**と思う」

パ「**す、す、すっごい**お金かかるじゃん」

秀「でも、例えばサンリオのピューロランドってあるじゃない。そこにいるキャラクターがディズニーランドにいたら違うでしょ。それぞれのキャラクターはそれぞれの生まれた国にいなくちゃいけないし、国籍を混ぜちゃいけないって思うんだよね」

パ「普通さぁ、とりあえずなんでもやって、**経験をつんでステップアップ**してくっていうもんなんじゃない?」

秀「う〜ん、もしそう思っているんだったら、学生の頃からサンリオに働きに行ってたと思う。とにかく、今は自分をさらけ出したい。100%出し切れてないうちからマイナーもメジャーもないし、どんなカテゴリーにもとらわれたくない」

パ「要するに、何にもとらわれずに自由に自分を全部出し切らないと、コマーシャル的なものはスタートできないってことね。その感覚、わかる、うん」

秀「例えば、僕が女装しているのを人がオカマーって言おうと、ホモーって言おうと好きにしてぇーって感じ。僕は、カワイイって思えばスカートもはけばヒールも履く。恋愛も同じことで、性別は関係なくて、男であろうと女であろうと、その人を好きになったら付き合うだけ」

SPA!「でも"生きることが芸術だ"なんて、誰でも言えちゃいますよね」

パ「本当は何をしていようと、普通のサラリーマンであろうと、自分自身が作品だって言わなくちゃいけないハズだよ」

秀「そう。みんなそういうこと忘れてるから、僕があえて言ってるんだ」

パトちゃん日記

6月21日

日本語のローマ字表記はこの日本がよーく表れてる。とりあえずこうしときましょうかっていう、曖昧さが笑いを取っちゃうはめに陥ってるんだよなー。「山手通り」だったら本当は「YAMATE AVENUE」か「YAMATE DORI」でしょ。大したことじゃないよ、って思ってる人! あんただってロンドンの中華レストランのメニューで「SPRING ROLL」の和訳が「春巻ロール」になってたらわかってないってバカにしちゃうでしょ。

東京は国際都市なんでしょ。しっかりしてよ

「最終的な目標は、スーパースターです!」

パトリックDJ情報●7/19(金)LAB TRIBE in 京都●7/20(土)CARMA in 大阪●毎週月曜 LOOP on 246

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70 (株)扶桑社 週刊SPA!編集部「パトリック係」まで

撮影/高橋清人

パトリックのカミングアウト大作戦

今週のカミングアウト

顔相学者にパトの異相の分析を頼んだら……

一度見ると忘れたくてもなかなか忘れられない顔を持つパト。この異相は運命を暗示しているに違いない！　と顔相学者に診てもらった

藤木相元（ふじきそうげん）

'23年兵庫県生まれ。多宝塔寺にて修行ののち得度。三輪宗に伝わる嘉祥流観相学を学ぶ。現在、三輪宗・慈智院大僧正、嘉祥流観相学導主を務める。観相学とは、様々な環境の中で様々に発達した脳が、個人の顔を作り上げるという考えに基づき、顔のパーツからその人の人格、運命などを読み取る学問。しかも世界共通のものというので、パトリックの顔もお願いすることに。パトのことを全く知らなかった先生は、スペイン人？とか、結婚はしてるの？とか、かなり面白いスタートを切っていた。

藤木「実に発展性のある顔をしてるねぇ」

パトリック「**発展性のある顔**っていうのは、どこらへんが……」

藤「スゴイんだよ、この額が。まるで老人がハゲたようにパーッと広いでしょ」

パ「はぁ～……」

藤「アンタはね、一見勉強家に見えないけど、本当はものすごく勉強家だね」

パ「ほぉ～」

藤「それと、その額の真ん中の膨らみも特徴的なことですよ」

パ「ああ、このオデキね」

藤「これはね、オデキじゃないの。これはね、あなたのもってる前頭葉の独特なものですよ。こういうのがある人っていうのは非常に珍しいんです」

パ「うまく使うには、どうすれば？」

藤「今日からね、**自分には超能力があるって認知しなさいよ。**ここはね、訓練すると超能力が出るようになるから」

パ「はっ、そうですか!?　ってことはカワイイなって思う人のズボンをハーッておろすこともできる？」

藤「……。アンタのそういう茶目っ気はね、表面だけね。内面的には立派なものがあると思いますよ」

パ「ああ、そうですか。周りのみんなにはいい加減って言われてますけど」

SPA!「へぇ～、知ってたんだ」

藤「眉も太くて濃くて立派。何かを征服しようっていうものがある。でも目が大きすぎる。何もかも見えすぎで、非常に現実的。**もっと夢を持ちなさいよ**」

パ「そういうのって顔に出てますか？」

藤「アンタ、私が言ってるのは顔のことだよ。でも、このカッと出ているアゴはマイナス・ポイント。これはね、**自己過信**。しかも愛情家。時として、愛に溺れることもある。愛情の世界には弱いよ」

パ「は～は～は～は～」

一生外さないハズのピアスを外す瞬間

藤「耳もいいねぇ。耳は3つに分けて考えるんだけど、一番上が知力、真ん中が行動力、一番下が人格。この人は全部あるんだけど、特に人格はありますよ。でも、**ピアスを開けてちゃダメだよ**」

パ「あっ、そうなんですか？」

藤「穴を開けるってことは、**非常に愚かなこと**なんだよ。それだけ肉づきのいい耳の肉を削いでるわけでしょ。肉っていうのはね、伊達や体裁でついてるんじゃねぇんだよ。よりよくしようと思ってついてるんだよ。それを、穴を開けたらせっかくの人格もなくなるよ。損だよ」

パ「ピアス外すとどうなるんですか？」

藤「人格が出てくるよ」

SPA!「痛いとこ、つかれてるねぇ」

パ「当たりすぎてるよ！」

SPA!「ちなみに、ベロも開いてるんですけど、これは……？」

藤「……。**アンタね、ベロっていうのはね、健康にとって大切な所なんだよ。**舌は病気を予知する所なのに、それをアンタ、穴を開けるなんて舌に可哀相だよ」

パ「舌に可哀相でもいいんですよ」

藤「キスするのに邪魔だろう」

パ「全然、逆に相手が遊べるから大丈夫」

藤「困ったもんだね、この自己主張は」

パ「僕にとって舌って気持ち悪いところなの。いつも白いし」

藤「白いっていうのは胃腸か肝臓の調子が悪いってことだよ。それは治さな。アナタが本当に成功をしたいなら、健康でいなければならんですよ。自分の内臓をいたわりもしないでね、成功だけを夢みたって、何の価値もないですよ」

パ「治せるもの？」

藤「**治せるよ、そんなの。**アンタが大物になったときに、内臓だけ小物のままにしておいてどうするんだよ。全体が大物にならないと。せっかく俺んとこ来たんだから、一つくらい聞いてきなさいよ。悪いこと言ってんじゃないんだから」

パ「ベロと耳っていうのがなぁ。一番好きな場所だからなぁ。**今までずっと、自分の体の一部としてピアスを開けていたんですよぉ……**」

藤「**だから、自分の体の範囲内でしか成功しないんだよ。**年々歳々、新しい自分を作ってかないと」

パ「ベロと耳かぁ……」

藤「そう。他は妥協するよ」

パ「でも、**そういえば最近、ベロのピアスは邪魔がなって思い始めてて**……」

SPA!「おい！『これがボクの生き方だ！』って、記事にまでしたじゃんかよ！」

藤「外しなさいよ。自分で自分の体をいじめちゃイカンよ！」

……舌のピアスを外しだすパト。

SPA!「いいのぉ？　ホントに？　一生外さなかったんじゃなかったの？」

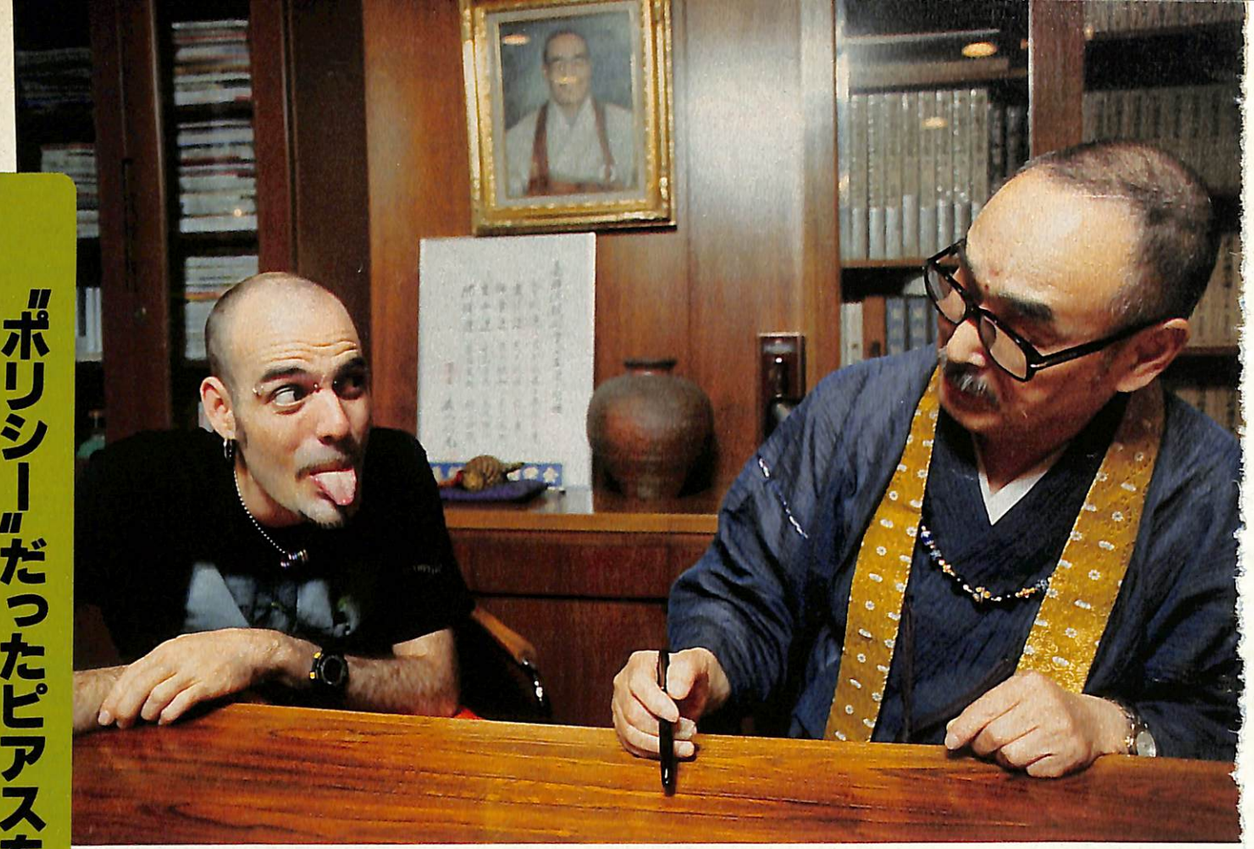
パ「ん～？　いいの！」

……そして、舌のピアスは外れた。

パ「耳は家に帰ってから外します！」

結局パトは耳のピアスも外した。ポリシーも健康への誘惑には勝てないのか……。

撮影／高橋清人



"ポリシー"だったピアスを次々と外しはじめた……

眉間の所と下唇のピアスは自分をうまくアピールしてる、とお褒めの言葉を頂いた。が、どうせ着けるならゴールドにしろ、と言われて真剣に悩むパト。舌のピアスはその場であっさりと外してしまった……

パトちゃん日記

アメリカ旅行日記

仕事一筋の僕が無理やり2週間もアメリカに行ってきました。実はお婆ちゃんが危篤だったのだ。だけど僕が会いにいったおかげでお婆ちゃんは、ひ孫の誕生会にお化粧して起きれるくらい回復。うつ、嬉しい。で、安心した僕はせっかくだからニューヨークへ（僕の仕事関係の人たちへ。あくまでも、お婆ちゃんに会いにいったついでだからね！）。友人たちにバカうけした日本のおみやげは「歯磨き粉」。歯磨き粉に塩とかビタミンとか入れるなんてアメリカ人は考えつかないもん。逆にニューヨークで新しいな、って感じた物は地下鉄のホームの「サウンドセンサー」。手をかざすと、いろんな音色が奏でられてホームの向かい側の人と音を鳴らしっこして遊べる。最高！　いいよ、これナンパに使える。

お婆ちゃんと僕の弟の息子のシージェー

げっ！て言ったくせに毎朝これで磨いてたロブ君

街の中のアートってことなんだけど、治安維持にも役にたつのだ

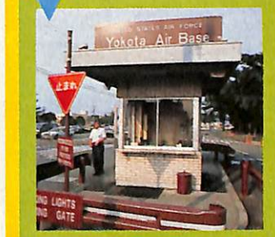
パトリックDJ情報●7／19㈮ LAB TRIBE in 京都●7／20㈯ CARMA in 大阪●毎週月曜 LOOP on 246

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70 ㈱扶桑社　週刊SPA！編集部「パトリック係」まで

沖縄問題以降の横田基地内部と周辺住人の"本音"

パトは音、父親の仕事の関係で横田基地内に住んでいた。米兵の"本音"を知るパトが、沖縄問題以降の基地とその周辺の意識変化を探る

今週のカミングアウト



横田基地とパトリック

'40年に日本帝国陸軍の飛行場として誕生し、'45年以降は、在日米軍が駐留する横田基地。14年前、パトリックはお父さんの仕事の関係で、基地内で生活していた。どんどん日本人と交流しようとしていたパトとは違い、当時の基地の多くの人間は日本人をイエローモンキーだといってバカにし、基地の外へ出ようとしなかったという。沖縄問題で米軍基地の存在がクローズアップされる中、今も基地内の人たちの意識は変わっていないのだろうか？　周辺の日本人の意識はどうか？　パトは14年ぶりに、横田基地を訪ねることにした。

福生駅から車で5、6分のところに横田基地はあった。基地の広報担当の阿部政夫さんに案内されてパトリックの運転するワゴンはゲートの中へ。そこは、もう日本ではなく、アメリカだった。

「うわぁ、懐かしい。あっちが僕の住んでいたエリアで、こっちが学校で……。ねえ阿部さん、あそこに映画館があったんじゃなかったっけ？」

14年ぶりの訪問に、はしゃぐパトリック。SPA！は、初めて見る基地内の景色にドキドキしている。迷彩服を着た黒人兵士に買い物カートを押す白人家族。建築物などの、あらゆるデザインも当然アメリカスタイル。たまたま日差しが強く、カラッとした天気だったせいもあって、ハワイにでも来た気分だ。

当時パトリックが住んでいたという場所に行ってみたが、残念ながら建物は建て替えられていた。そういえば、**基地内のあちこちで建設中の工事現場が目に入る**。横田基地内もどんどん変わっているのだ。もしかしたら、かつてパトリックが不快に思った、日本人への偏見も変わってきているかもしれない。

取材中に偶然知り合いになったジム・ギャラガーさんに話を聞くことができた。ジムさんは'84年に来日し、その後イギリス勤務を経て再び日本へ。奥さんは日本人であり、剣道も二段という腕前。将来も日本に永住を希望しているという親日派だ。仕事後のインタビュー時には、作務衣に着替えて現れた！

パト「僕がいた頃は、みんな日本人のことをバカにして**文化どころか言葉も覚えないくらいだった**けど、今はどうなの？昔は〝**基地の外は動物園**〟みたいな見方をしているのが気持ち悪かった。その意識が沖縄の事件を生んだと思うしね」

ジム「結局、そういう差別をしているのはあまり程度のよくない連中なんだ。しっかりした考えをもっている人は、ちゃんと日本の文化を学ぼうと思っているよ」

パト「特に米軍の中でもジムさんが所属しているエアフォースは、今は入るのが難しくなって頭のいい人ばかりだから、偏見も少ないんだろうね」

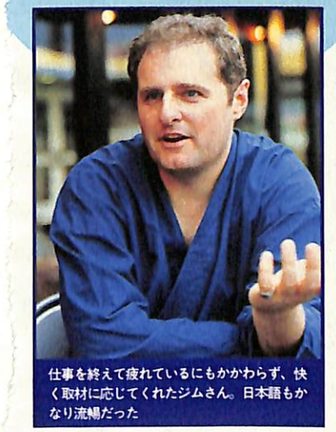
ジム「**やっぱり、外国に勤務するならその国の文化を学んでおくべきでしょう**。僕が剣道を始めたのも、一番日本の心を学ぶことができると思ったからだよ」

パト「そうだよね。僕と考え方は全く同じだな。ところでジムさんは、日本に米軍の基地があるということについてはどう思っているの？」

ジム「必要だとは思うけれど、世界の情勢も変わってきているから、今のように沖縄に集中して基地があるというのはよくないね。もっと各地に分散させて、少しずつ減らしていくべきだろうね」

基地内の滑走路にて。奥に見えるマンション群も基地の施設。その広さと映画館から放送局（FEN）まで揃えた設備の充実には驚いた

かつての我が家は跡形もなく消えていた……


仕事を終えて疲れているにもかかわらず、快く取材に応じてくれたジムさん。日本語もかなり流暢だった

撮影／高橋清人　撮影協力／ZUCCOTTO

日本語すら全く覚えようとしない米兵の意識が問題だ！

やっぱりどこかに植民地意識がある!?

今度は、基地の周辺で米軍を相手に商売をするお店の人の意見も知りたい。エスニック料理を出すバー、「レッドバード」のキスノテツヤさんに話を聞いた。

パト「テツヤさんは、基地の人に日本人がバカにされてると思うこと、ありますか？」

テツヤ「やっぱり**どこかに植民地意識がある**ってことは否定できないでしょうね。基地で買ってきた安いビールを持ち込んできて、店では注文しないなんてことをする人もいますし。まぁ、注意するとおとなしく出ていきますけど。何年もこっちにいて、全く日本語覚えていかない人も多いですよね」

パト「**初めから覚える気がないんだよ**。僕はね、基地も大使館もある意味で同じような仕事なんだから、働く人は来る前に文化も言葉も勉強してからにしてほしいと思う。さっきのジムさんみたいに」

テツヤ「一緒に六本木とか遊びに行くと、兵隊のヤツって、兵隊じゃないアメリカ人の前では身分を隠すんだよね」

パト「アメリカでは、他に仕事ができなかったから軍に入ったというイメージがあるんだ。だから隠しちゃうんだよ」

テツヤ「あと『オレは兵隊だけど、輸送機だから武器は持たないんだ』とかいうよね。やっぱり人殺しだと思われたくないってのはあるみたい。それから「**沖縄の事件はマリーンがやったことだ。オレたちはエアフォースだから**」とも言うよ」

パト「エアフォース、ネイビー、アーミー、マリーンの順に偉いっていう意識があるんだよ。**彼らも軍隊内で差別し合ってる**」

テツヤ「でも彼らも沖縄問題以来、ナーバスになってるみたい。飲みに行っても日本人に罵声を浴びせられたりして」

今は、米軍兵士たちの意識も複雑に揺れ動いているようだ。

パト「逆に兵隊目当てで来る日本人の客もいるんでしょ」

テツヤ「うん。みんな福生特集の『Hanako』とか持ってね（笑い）。そういう人は僕たちに『ここ兵隊よく来ますか？』って必ず聞くんですよ。それで兵隊が来ると『**ほら来たよ来たよ**』ってうれしそうにしてる」

パト「日本人が動物を見る気分でここに来るわけだ。昔と逆だなぁ」

テツヤ「あと気付くのは白人と日本人の女のコのカップルだと支払いは男、黒人と日本人の女のコだと、支払いは女のコなんだよね」

パト「それは目的が違うからだろうね。白人につくコは結婚が目標でしょ。黒人につくコは、やっぱりセックス！　でっかいオチンチンが目当てだから。自分で払って主導権を握りたいんだろうね」

最近は米軍の人間だけでなく、アジア系やイラン人も増えたという。

テツヤ「僕は**いろいろな人間がごちゃまぜになっているところが好き**だから、福生がさらに混沌としてくるのは面白がっているけどね」

かつてパトリックが気持ち悪いと感じた基地内の人々の意識も、基地をとりまく環境も変わりつつあるようだ。次回はこの福生で米軍相手に30年も商売をしているバーのマスターに話を聞く。

基地の周辺は米兵相手の飲食店や、米軍払い下げ品を売る店が多い

かつては赤線地帯だった福生の一角で、〝売春宿〟をバーに改装した「レッドバード」。「客の半分は米兵」というバーテンダーのキスノ氏

パトリックDJ情報●毎週月曜　LOOP on 246

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70　(株)扶桑社　週刊SPA！編集部　「パトリック係」まで

今週のカミングアウト

福生で30年続くスナックから見える米兵像の変化

父親の仕事の関係で横田基地に住んでいたパトが、日本人を小バカにして基地から出なかった米兵たちの悪態と、周辺住人の変化を追った

安本勝敏

1944年、岡山出身。'65年に上京し、整備工、基地専門の土建業を経て'67年に福生に「スナック由美」を奥さんの洋子さんと共に開く。以後30年近く横田基地のアメリカ兵相手に商売を続けている。福生の歓楽街の最古参のひとりでもあり、福生社交飲食事業組合の副組合長も務めている。アメリカへ帰った常連客たちとも長い付き合いがあるそうだ。

店の目玉はBTL（ベーコンとトマトとレタスのサンドイッチ）。米兵の間では「横田へ行くなら　由美」のBTLを食べてきな」といわれるほど人気があるのだ。

パトリックは14年ぶりに横田基地を訪れた。自分が住んでいた当時に基地内に蔓延していた日本人への意識と、周辺住人の米兵への意識が沖縄問題以降どう変化したのかを知りたかったからだ。

先週は比較的若い世代の話を聞いた。そこで今週は、30年近くも福生で横田基地の米兵相手にスナックを営んでいる、基地周辺住人の〝長老夫婦〟に、米兵の変化と彼ら自身の本音を聞いた。

パトリック「そもそもなんでここでお店を開いたの？」

安本「兄がこっちにいてね。面白いから居座っちゃったんだ」

パト「当時から基地相手の飲み屋でしょ。英語はできたの？」

安本「全然！　BEERがビールだってこともわからなかったくらいだよ」

パト「それでよくお店開いたねぇ」

安本「でも水商売の経験がない素人が店を開こうと思ったら、たくさん店があるところでやるしかないんだ。それなら客が流れてくるからね。当時、この辺りは基地相手の店がいっぱいあったんだ」

パト「その頃は1ドルが360円で固定してたんですよね」

安本「でもグリーンは使わなかったよ」

パト「グリーン？」

安本「ドル札のことさ。当時はみんなMPC（軍票）を使ってたよ。本当は街で使っちゃいけないんだろうけどね。オレなんてグリーンは見たことなくて、MPCがアメリカのお金なんだと思ってた」

パト「ベトナム戦争の頃って、すごく儲かったんでしょ？」

安本「もう昼から店開けて休むヒマなかったよ。店内はギュウギュウ詰め。座れないからみんな立って飲んでるんだ。トイレに行くのも大変だったぐらいだよ」

洋子「ちょうどその頃、子供が生まれたんですよ。2階に寝かせてインターホンをつけっぱなしにして仕事してました。泣くとどちらかが上がってミルクあげてオシメ換えてって忙しかったなぁ。でも休むのがもったいなくて、休日なしで働いてましたね」

パト「ケンカとかなかったの？」

安本「外人がケンカ始めると手がつけられないからね。始まりそうになったらカウンターに置いてある棒をバーンと鳴らしてデモンストレーションよ。『シャラップ！』って怒鳴ってね。不思議なんだよ、怒ると英語が上手くなるんだ。汚い言葉がペラペラ出てくる（笑う）。すぐカウンターを飛び出してくるって有名だったよ」

最近は日本人のほうがタチの悪い客が多いね

パト「でも最近はお客さん、少なくなっちゃったんでしょ？」

洋子「ドルが150円切った頃くらいからかな。ドル安になるとお客の足がパッタリと止まるんですよ。しばらくすると我慢できなくなるのか、また来るんだけど」

パト「アメリカ兵って、昔と今と変わってきましたか？」

安本「うーん。やっぱり昔のほうがいい人が多かったかなぁ。しょうがないんだよ。経済的に余裕があったんだから気もよくなるよ。あの頃は20ドルもあればデロデロに酔っぱらってオツリが来たけど、今はロクに飲めないんだもん。お金なくっちゃピリピリしちゃうよ」

洋子「あと当時は徴兵されて来てたでしょ。頭のよさそうな人も多かったな」

安本「そりゃ今の人に悪いよ（笑う）」

パト「最近は軍も入るのが大変になってきたから、またレベルが上がってるんじゃない？」

安本「今は日本人のほうが威張ってるね。『おい、カネないんだろ。おごってやろうか』なんて言ってるよ。昔は日本人は何されても我慢してたけど、今は軍のほうで地元とトラブルを起こすなって厳しく言われてるみたいだよ。日本人のほうがタチ悪いよ。若いコは意外にマナーがいいんだけどさ、堅い仕事をしている人はダメだね。酒癖悪くてからんでくる。普段ストレスたまってるから酒飲むと爆発しちゃうんだろうね」

パト「もし基地がなくなったらって考えたことありますか？」

安本「あんまり考えないね。もしなくなるとしても横田は最後だろうから、ずっと先の話だと思うし。考えてない人は簡単に『アメリカ軍はみんな出ていけ』なんて言うけど、とんでもないね。アメリカがいなくなったら日本は絶対危ないよ。だって今でも世界のあちこちで殺し合いやってるわけじゃない？　日本自体は大した軍事力持っているわけじゃないから、どこから攻められてもおかしくない。アメリカ軍を追い出しといて、後で泣きついても面倒見てもらえないよ」

30年間も福生で基地と付き合っている安本さんの目から見ると、米兵はどんどん元気がなくなっているように見えるらしい。沖縄の事件など、我が者顔でのし歩いているイメージのある米兵だが、最近ではむしろ日本人からのイジメにガマンしているという現実もあるようだ。基地と周辺住人の〝人間関係〟は、複雑である。

「スナック由美」自慢のBTLを御馳走になったパトリック。「これは本当に美味しい！」と言って一人で全部食べてしまい、SPA！から恨まれたのだった……

パトちゃん日記

アメリカ日記Part2

今回の旅行で8年ぶりに弟にも会った。都会嫌いで6年間米軍に勤務してた弟と僕とではやることも性格も正反対だけど子供の時から仲がよかった。HIVのことを最初に伝えたのも家族では弟だったし。弟の米軍勤務の動機はいわゆる「国家公務員」だから。アメリカの軍では勤務しながら奨学金を受け大学にいくこともできるのだ。会社に入って身をすり減らして大儲けするより、心身を肥やしたいって考え。現代っ子って感じちゃった。

素敵な家庭を持つ弟はすっかりオヤジに……

「1ドルが150円を切った頃から、ピリピリしだしたよね」

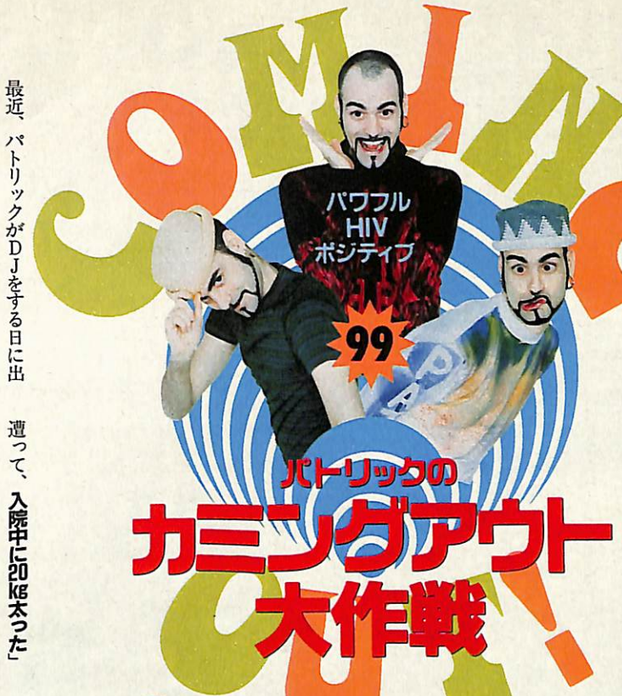
パトリックDJ情報●8／3（土）CONTROL in　小山●毎週月曜　LOOP on 246

パトリックへのメッセージのあて先●〒105-70　(株)扶桑社　週刊SPA！編集部　「パトリック係」まで

撮影／高橋清人

「かっこよく太るのって、かっこよく痩せるのと同じくらい難しいんだよ！ 水分いっぱい取ったりとかさぁ」とカワイちゃん

「デブってことで人の心をワッと捕らえられるなんて光栄！」



パトリックの

カミングアウト大作戦

今週のカミングアウト

ポジティブ・デブとHIVポジティブの類似

年頃の女のコが当然の如くモーレツなダイエットをしている昨今、あえてデブ道を邁進する女のコがいるという。一体、その生き様とは？

カワイ麻弓

'71年、東京生まれの芸術家。多摩美術大学彫刻科卒。今年6月には、「くらしズム'98」という個展を開催。テレビからティッシュにいたるまで暮らしを丸ごと"カワイ・ブランド"にアレンジするというもので、開催していた2週間、ギャラリーで寝泊まりをした。また、クラブ・イベントなどでの人気も高い。基本的な収入源は、家賃納入間近になるとまとめて働くアルバイト。が、取材当日バイト先での居眠りが発覚し、クビになる。現在、無職。だが、これからの活動が非常に期待できる異色の芸術家である。

最近、パトリックがDJをする日に出没する謎めいたブキミ系のコがいるという。一言でいうと、

『日本のディバイン』みたいな人」

かく言うパトに連れられて、そのカワイ麻弓なる人物の実態をつかむべく彼女の家を訪ねることになった。

パトリック「カワイちゃんは**デブ**ですね」

カワイ「ねぇ～、ホントー。**パンパン**」

パ「生まれつきそうなの？」

カ「子供の頃からデカイ子で4、5年前まで身長170㎝で体重70㎏くらいだったんだけど、大学3年の時に交通事故に遭って、**入院中に20㎏太った**」

パ「どのくらい入院してたの？」

カ「半年くらいかな。足の骨がグチャグチャに折れて動けなかった上に、入れ代わり立ち代わり友達がケーキとか持って来て、**一日にワンホールは食べてた**」

パ「スゴイねぇ」

カ「病院の食事ってマズイから、公衆電話からピザ取ったりもした」

パ「あっ、そう」

カ「これはね、病院中の**ホットな噂**だったんだけど、カワイの主治医がど～も、**デブ専**だったみたい。やたらと食え、食えって言ってたし」

パ「なるほどね、その先生はカワイちゃんを太らせることが目的だったのね。でも、今ってみんなダイエットしてるでしょ。それはどう思う？」

カ「いや～みんな**大変ご苦労**って感じ」

パ「……」

カ「なんかね、自分を変えた一発っていうのがあって、高校生の時に見た『ヘアスプレー』っていう映画なんだけど、"**かっこいいデブとはコレだ**"って思ったね。さらに『私ならもっとかっこよくなれる』とも思ったな、うん」

パ「でもさぁ、道歩いていて『デブ！』とか『ブス！』とかって言われない？」

カ「いやぁ～、ずっと太ってる人生だから今やカワイの耳には入らないんだけど友達によると、いわゆるコギャルは『今の見た？ **ヤバくな～い**』って言って、モード系のコたちは『今のすっごく**カワイイ！**』って言うんだって」

パ「それはわかる。僕もオカマだって言われても耳に入らないっていうか、余裕のある時はわざと『そうなのよ、オカマよぉ～』って言ってあげたりする。オカマって言われるか、カッコイイっていう目で見られるかのどっちかだから」

カ「ほら、よくいるけど『ワタシってデブだからぁ～』とか言うデブって嫌い。そんなに嫌なら痩せろよって」

パ「デブってことをマイナスにとらえてるヤツね」

カ「カワイもデブに飽きたら痩せるんだろうけど、もし痩せたらヤバイとも言われないかわりに、カワイイとも言われないと思う。**そこらの電柱と一緒**。普通の体型よりも**デブってことで人の心をワッと捕らえられるなんて光栄じゃない？**」

撮影／高橋清人

デブもHIVも相手の愛情を本物か判断できる好材料

パ「聞いたところによると、より太ったほうがモテるらしいじゃない？」

カ「ものすごい図々しい発言になるんだけど、好きな人ができて仲良くなりたいなって強く願うとかなう体質みたい。だから恋人が欲しいからって痩せる必要もなくって。しかも、人がうらやむような男子だったりして……」

パ「それってデブ専なんじゃないの？」

カ「違うよぉ～。あっ、でも**デブに目覚めさせた**ってこと、かな!?」

パ「結構それって、パトちゃんに近いものがあるかもね。僕の場合は**ノンケをゲイの世界に目覚めさせる**んだけど」

カ「ウヒヒヒヒィ～。えっ、パトってそうだったのねぇ」

パ「たまたまね。でもさぁ、僕の場合HIV持ってることで、本当に僕を好きになってくれる人と、HIVを持ってるから好きになる人がいることがわかったんだけど、カワイちゃんもデブってことでだけで言い寄られたりしない？」

カ「日暮里系とか歩いてるとあからさまにいるよね。でもデブってことは自分が好きになる男のコに対して一つのバロメーターになってる。セックスはするけどデブだから連れて歩きたくないってヤツはその程度。**本当にカワイを好きになってくれる人っていうのはデブを問題にしない。**それって普通のギャルが男子から好きって言われるよりも、きちんと認めてくれてるって感じで**幸せ100倍**じゃない？」

パ「なるほどね」

カ「デブってことは**相手の愛情が本物か判断できる、おいしい材料を持ってる**って思ってるから」

パ「なんかアンタ、魅力的な人間だね」

カ「キャー！ ありがとう」

パトリックにとってHIVがポジティブに機能するように、カワイちゃんにとってデブがポジティブなものなのだ。いやはや、カワイちゃんパワーには恐れ入った。

パトちゃん日記

7月20日

もうっ夏って大嫌い！ 夜のDJに備えて昼間寝なきゃならないのに暑くて寝れないし。頭もボーとしてるし。AIDSのボランティア団体の友人からTシャツにイラスト描いてって依頼がきた。300人のいろんな人にその依頼をして全300枚のTシャツを展示するんだって。そこでイライラ解消にTシャツにイラストじゃなく刺繍することにした。そしたら、はまっちゃってさー。イライラ度は少しおさまったかも。

もちろんクーラーガンガンの部屋での刺繍作業

パトリックDJ情報●8/3(土)CONTROL in 小山●毎週月曜 LOOP on 246

次週は100回記念！ 大増ページの特別企画に乞うご期待!! パトへのメッセージのあて先●〒105-70 (株)扶桑社 週刊SPA！「パト係」まで

SPECIAL SESSION

Ryuhei Kawada & Patrick

スペシャル対談

川田龍平&パトリック

感染経路を飛び越えた"個人的なHIV"について

パトリックと川田さんの出会いは'95年の7月、厚生省を人間の鎖で囲む集会の応援に行ったときだ。そこではパトがほんの一言声を掛けただけだった。続いて今年の2月、厚生省前で3日間の座り込みをしたとき、偶然その日仕事で一緒だったサンプラザ中野氏を連れてパトが再び応援に行った。昔からサンプラザ中野氏の大ファンだった川田さんは大感激。裁判が終わり、少し落ち着いてからは爆風スランプのコンサートに一緒に行ったり、時々電話で話をしたりというごく普通の友達関係が続いていた。今回は連載100回という節目に「一度、まとまった話を龍平くんとしたい」とのパトの希望に、川田さんが快く応じてくれた。

パト とりあえず裁判がいい結果に終わってよかったね。土下座して謝ったときはボクもすごく気持ちよかったよ。

川田 あれは僕もうれしかったです。でも〝裁判が終わった〟っていうだけで、「なぜこうなったのか」の真相究明や治療センターの整備の問題とかはこれからですからね。

パト なんか忙しそうだもんね。

川田 本をまた出すんです。それの締め切りとかがあって、もう寝れないですよ。

パト でも本書いたりすると考えがまとまって、自分の中で何か出てくるでしょ。

川田 そうですね。でも、恥ずかしかったですよ、自分の内面を全部さらけ出したから。テレビとかじゃ言えないようなことを書いてしまって……。

パト えっ！ どんなこと？

川田 いやー、それはちょっと（笑い）。

パト あっ、本を買えってことね！ ちょっとくらい言いなさいよ！ ボク、日本語読めないんだから（笑い）。

川田 あと、もうすぐカナダに行くんですよ、エイズ国際会議で。

パト バンクーバーね。どれくらい？

川田 1か月半くらい。

パト えっ、なんでそんなに長く行くの？ あっ、ついでに遊んでくる気だな！

川田 で、そのあと帰ってきたら、すぐヨーロッパに行こうと思ってて……。

パト いいなあー。まったく、大学生なんていって、遊んでばっかりじゃん！

ここ1年ほど、メディアでは「エイズ問題＝薬害エイズ訴訟」という状態が続いた。「セックスでも感染する」ということは、見たくないものとして引き出しの奥に入れられたかのようだった。世の中が薬害のことに集中していたこの期間に、セックスで感染したパトが個人的に感じたことを川田さんに正直にぶつけてみた。

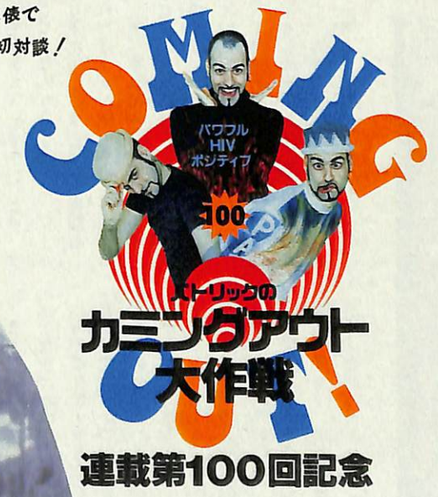
パト ちょうど1年くらい前に「厚生省を人の鎖で囲む」っていうのをやったでしょ。ボクはあの集会に行ったときに、もちろん誰も目の前では言わなかったけど「パトちゃんにここに居てほしくない」

同じＨＩＶというウイルスと立ち向かいつつも、
かたや「薬害」という土俵で闘ってきた川田龍平さんと「セックス」を通して
ＨＩＶを語り続けてきたパトリック。
〝薬害感染は国の被害者、セックス感染は自業自得〟というエイズの２次的な差別構造が
指摘された時期を乗り越え、
「ＨＩＶを持って生きる」という同じ土俵で
感染経路の異なる２人がメディアで初対談！

今週のカミングアウト

川田龍平

'76年、東京生まれ。生後6か月で血友病と診断され、3歳から非加熱血液製剤を使用。10歳でＨＩＶに感染しているとの告知を受ける。'93年に東京ＨＩＶ訴訟に参加し、'95年の3月に記者会見で実名を公表した。その後の活躍ぶりは周知の通り。今年の3月には和解が成立。
現在は東京経済大学の2年生で、趣味はトランペット。大学では「ラテン音楽愛好会」に籍を置く。講演会や本の執筆などで多忙な日々が続いており、7月にこの1年間の経験を整理した単行本『龍平の現在』（三省堂）を上梓した。



連載第100回記念

っていう雰囲気を感じちゃったのね。

川田　うーん、そうかなぁ……。あのときはとにかく誰でもいいから一人でも多く来てほしかったけど……。

パト　もちろん龍平くんはそうだと思うよ。でも、まわりの空気にそれはあったよ。だって、あのときのテレビで「薬害の人は、セックスで感染した人と違って、国の犠牲者なんです！」とか叫んでる人が映ってたりしたじゃない。

川田　あー、ありましたね。僕も観ましたよ、それは。

パト　そうやってメディアが集中して薬害エイズのことを扱ったことで結果として、誰が悪いっていうんじゃなく〝良いエイズ〟と〝悪いエイズ〟みたいなイメージが生まれちゃったように思うのね。

川田　それは僕も講演会で言われたことありますよ。僕が「HIV感染者だから実名を公表したんじゃない。薬害を知ってもらいたいから実名を公表したんです」って言い続けたから、「それは（薬害以外のHIV感染者に対する）差別なんじゃないか」って質問されたことがあるんです。でも、僕はやっぱり薬害を知ってほしかったし、責任をはっきりさせたかったし、何より裁判に勝ちたかった。だから、それを強調したんです。だけど、〝良いエイズ〟なんてないですよ！こんなの害しかないんだから。

パト　区別というのはわかるよ。薬害とそうじゃない人で状況が違うのは当然だし。ボクは薬害に対してどうのこうの言える立場じゃないし、悪いことをされてHIVをもらったんじゃないからね。ボクはすてきな関係の人からHIVをもらったから。でも、ボクの講演会の中でも「薬害の人はわかるけど、セックスの人のことは考えられない」とか言う人が出てきちゃうのね。それはやっぱりムカツクんだよね。

お医者さんから薬をもらうのも、セックスすることも、両方〝自分の問題〟だからね

ところで、龍平くんってセックスしたことある？

川田　確かに「薬害だから協力するんだ」っていう人は多かったかもしれませんね。でも薬害で感染して、その人に奥さんがいてセックスで感染したというケースもあるわけだから。

パト　あの集会のときも「あなたたちだってセックスするでしょ！」って言いたくなっちゃったもん（笑い）。もちろん、あの場で言うようなことじゃないのはわかってるけどさ。

川田　うーん……、そのことはちょっと心苦しいですね。あの時期は薬害の責任をはっきりさせたいっていう一心でしたから。でも、僕なんかにしても、責任のところの片が付けば、ただの感染者のひとりですよ。その点では、差別する意識なんて全くないんです。

パト　エイズのことって、すごくきれいな〝社会問題〟って看板に仕上げて、「社会問題だから係わる」っていう人が多いの。もちろん全員がそうじゃないけど。

川田　やっぱり〝自分の問題〟だと思ってないから、さっきみたいな発言が出ちゃうんですよね。でもそういう意味では、セックスで感染した人も薬害のことを言っていいと思いますよ。

パト　もちろん！　お医者さんからお薬をもらうこともセックスすることも、両方、身近な自分の問題のはずだからね。ところでさあ、龍平くんってセックスしたことある？

川田　えっ……、うーん、それはちょっと（笑い）。

パト　イエスかノーだよ、簡単でしょ！

川田　それは本で……。

パト　ちぇっ！　言ってほしかったなぁ。っていうのはさあ、HIVを持つと考えなきゃいけないことがいっぱいあるじゃない？　で、それを〝一番忘れたいとき〟が「セックスするとき」なんだよね。でも、そのときこそ一番考えなきゃいけないじゃん。その話をしたかったの。

川田　まあ、一番考えたくないのはそういうときですよね。でも、結構自制してますね。逆にHIVがあることで、（自制が利いて）女のコをいっぱい悲しませなくて良かったな、と。なかったらヒドイ男になってたかも（笑い）。

パト　えー、そうかなあー、アンタ、そこまでモテるか？

川田　うわー、ひっでえ～（笑い）。

パト　もちろんボクにはモテるよ、だって龍平くん、カワイイんだもーん♥

川田　……。

お母さんのこと、そしてエイズ告知の苦しみについて

パトはこの対談の直前までアメリカに帰国していた。祖母が危篤だったからだ。実は帰国の際、一つの決心をしていた。ずっとHIVのことを言えなかった母親にすべて話そう、と。だが、依然として母親は「自分の子どもがゲイである」ということすら受け入れられず、結局HIVのことどころか、ろくに話もできずに傷心して日本に戻ってきたのだった。

パト　ボク、龍平くんがすごくうらやましいんだよね。お母さんとうまくいってるじゃん。

川田　ええ、そうですね。

パト　ボクは全然ダメで家を飛び出しちゃったから、いまだにHIVのことも話せてないの。ずっと嫌いだったけど、なんかやっぱり人間ってお母さんから生まれてきたからさ、最後の最後にはお母さんの精神的なサポートが欲しくなっちゃうんだよね。「大丈夫だよ」って。まあ、その代わり、離婚したけどお父さんのほうとはすごく仲がいいけどね。龍平くん、お父さんとは？

川田　月に1回くらいは会いますよ。

パト　龍平くんの家も離婚してるんだよね？　なんで？

川田　なんでって……、やっぱり裁判のことでですね。父親は裁判に反対だったんですよ。裁判やっても勝てないし、何十年もかかる。ちょうど裁判を起こす頃は「エイズは5年、10年しか生きられない」って言われてて、父はそれだったら今、自分の健康に気を付けたほうがいいっていう考え方だったんです。

パト　龍平くんがエイズだってことを親から知らされたのは、10歳のときだもんね。今もまだ20歳でしょう。ボクなんか8年前に知らされて、今30歳だけど、考えなきゃいけないことがいっぱいあり過ぎて時々「忘れたい！」とか「逃げ出したいー」って思うことあるもん。お父さんの考え方もわからなくもないね。

川田　僕なんかよりアメリカのジョナサンくんなんて、2歳とか3歳で聞かされたんですよね。今もまだ13歳でしょう。

パト　2歳で聞いてもわかんないよねえ。

川田　まあ、そういう意味では小さいう

まず薬害の責任をはっきりさせたかった。でもそこの片が付けば、僕もただの感染者

SPA！'95年9月13日号より

連載第100回記念
スペシャル対談

"自分を認める"ことが一番大切！カミングアウトはその結果としてするもの

ちに聞いたほうが楽かもしれませんね。

パト あー、なるほどね。子どもだと「今付き合ってる人とはどうしよう」とか、「将来の結婚や子どものことはどうしよう」とか考えなくていいもんね。

川田 子どもだから考えなくていいというんじゃないけど、大人ほど余計なことは付いてまわらないですからね。

パト 実際、龍平くんがはじめて聞かされたときはどう思った？

川田 まあ、「やっぱりそうか」っていうことと「もう長くは生きられないんだな」ってことですね。

パト その他の余計なことはお母さんが考えていてくれたんだね。

川田 自分では考えないようにしてたけど、やっぱり考えてたように思いますね。ずっと病院にも通ってましたから。

パト 考えないようにしてるってことは、結局はずっと考えてるってことになっちゃうもんね。ところで、裁判が終わったとき、お父さんはなんて言ったの？

川田 まだ会ってないんですよ。

パト えっ、なんで？

川田 なんでって、忙しかったからですよ。

パト 忙しくても電話くらいできるでしょ！ 電話しなさいよ、今日！

川田 あ、ええ、はい。

医者との付き合い方はどうしているのか？

パト 龍平くんは前にお医者さんにヒドイことされてHIVもらっちゃったじゃない？ 今、お医者さんとはどう付き合ってるの？

川田 今通ってるのは、そのヒドイことされた後に、自分たちで「治療して下さい」って頼んで作ってもらった病院なんですよ。で、いつも治療方法を「自分はこれがやりたい」って選択してやってきました。

パト ボクもそう。それをするには自分でちゃんと薬の勉強とかしなきゃいけないよね。新聞とか雑誌で新しい治療法とかが発表されると、それをお医者さんに見せて、やるべきかどうか一緒に考えたりしてる。

川田 最近、学会で発表するよりも先に、新聞に出ちゃいますからね。

パト ちゃんと薬飲んでる？

川田 飲んでますよ、ddI。あれ、副作用で下痢になるでしょ。最近ずっとおなかがユルくて（笑い）。

パト えっ、そうなの？ ボク、昔からずーっと下痢体質だから全然わからなかった（笑い）。

川田 でも家にいろんなものが送られてきますよ。民間療法の薬とか。この前なんか、「ピラミッド・パワーで治してあげます」なんてのまで来ましたから（笑い）。

パト 何それー（笑い）。今度ボク、日本でまだ認められてない薬を飲んでみることにしたんだ。認められてないぶん、タダでもらえるからうれしいの。だって保険が利いてもさぁ、薬代だけですごいお金がかかっちゃうんだもん。

川田 ddIってホントに劇薬ですよね。あれ、絶対健康にはよくないと思うな。最近、薬のせいで顔にブツブツができて、すごい肌が荒れてきちゃったんですよ。

パト それはアンタ、にきびなんじゃないの（笑い）。

川田 そうとも言いますね（笑い）。

それでもやっぱりカミングアウトしたほうがいい！

パト ボクたちって2人ともメディアにカミングアウトしてるじゃない？ そのおかげで講演会をやれたりしてる。で、ボクはなんでそうしたかっていうと「自分のため」なの。自分のストレスを出すため。講演会をやるのも同じ。だから「もう自分は講演会はやりたくないー」と思ったら勝手にやめられるけど、龍平くんの場合は立場的にやめられないじゃない？ そういうのって辛くない？

川田 そうでもないですよ。みんな「あれだけがんばったんだから、少し休んでもいいよ」って言ってくれてるし。自分も今、講演会とかやるのは楽しいですから。いろんな人に会えて、いろんな所に行けるし。講演会って予想もしない質問されたりするじゃないですか。

パト あるよね。

川田 この間なんか「キリスト教をどう思いますか？」って質問されて（笑い）。キリスト教系の学校だったんですけどね。

パト ボクもよく変な質問されるけど、最後の感想はみんなすごくいいの。「まさかエイズの話聞いて元気がでてくるとは思わなかった」とかね。

川田 僕もそういうのが多いですね。全員がそうだとは思わないけど、1人でも2人でもエイズを"自分のこと"として考えてくれる人がいたらいいな、と思ってやってますね。反応はいいですよ。

パト じゃあ、カミングアウトして大正解だったわけね。

川田 そうですね。

パト ほかの人にもカミングアウトを薦めたりするの？

川田 僕はカミングアウトしたほうがいいと思うけど、強要はできないですよ。

パト ボクもそう思う。でも、最初は苦しいけど最後の結果を考えればしたほうがいいって思うよね。

川田 したほうが楽ですよ。

パト 自分の人生がちゃんと見えてくるもん。

川田 やっぱり「自分を認める」ってことが一番大切なことですよね。隠してることで、要するに差別してるんだと思うんです。

パト 自分で自分のことを差別しちゃってるよね。

川田 そう！ そうですよ。まあ、僕みたいな大学生じゃなくて、仕事とかがあると大変だとは思いますけど。

パト 別にメディアにカミングアウトする必要はないけど、自分の周りの大切な人にはしたほうがいいよね。

3時間にわたりたっぷり話して取材を終えた。「カナダから帰ったら連絡ちょうだいね」とパト。「みやげは面倒臭いから誰にも買ってきませんよ」と川田さん。2人は軽く手を振って、夕暮れのキャンパスで別れた。

「やりたいことがたくさんあり過ぎて困る」と川田さん。来年には留学を考えているという

パトちゃん日記

7月25日

日本の厚生省が承認するHIVの薬は「AZT」「ddI」「ddC」のたった3種類。薬の審査がかなり厳しいアメリカでも、もう6種類くらい承認されてるのに―。アメリカでは飲めて日本では飲めない薬の効力情報を新聞で読んじゃうとイライラしちゃう。厚生省は一体何をまごまごしてるの？　日本での安全性確認審査なんだろうけど、もっとスピードアップできない？　そんな声に反応してか「拡大治験」が始まった。簡単に説明すると、薬害エイズ訴訟が要求した条件の1つである「早く治療体制をつくる」ってことのおかげなのだ。主にアメリカで承認されている薬を1日でも早く患者に投与できるようにしたのだ。そのおかげで、僕も「3TC」って薬を飲めることになった。まだ承認されていない薬なので治験同意書にサインをした上でね。1日目から副作用の1つ「倦怠感」がでて、焦って先生に電話したら1回1錠なのに2錠飲んでた僕。バカ！のひと言ですな。

現在この「3TC」と「AZT」を飲んでます

連載第100回記念
スペシャル対談

これからもまだまだ続くパトの連載に応援のメッセージを！　あて先●〒105-70 (株)扶桑社 週刊SPA！「パトリック係」まで

撮影／高橋清人　撮影協力／東京経済大学